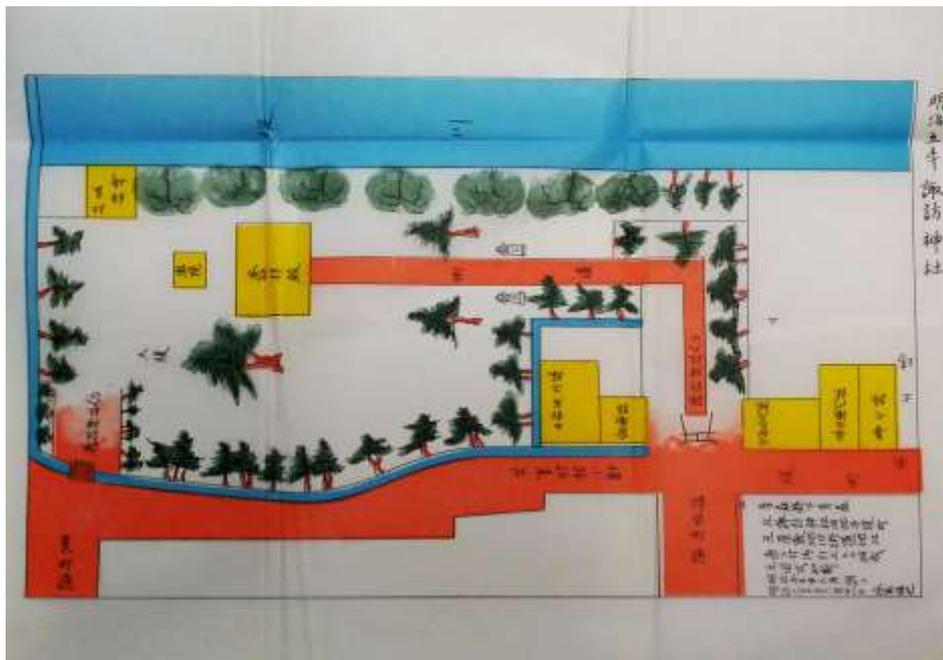


こんにちは！ 室長の工藤です。

今から約200年前の文政4年（1821）4月、南部領から関所を通過し青森町に「怪しげ」な人たちが入れ込んできたという情報が、青森にいた早道の者（諜者）から弘前藩庁にもたらされました。

最初は五戸の勘助と兵七で、彼らは4月19日に真綿売り偽り諏訪神社に止宿します。そして、翌日から真綿を販売するものの相場の下値で販売することなどから怪しまれ、町役が糺したところ、間者（スパイ）であったことが判明しました。



明治5年(1872)焼失前の諏訪神社  
（『青森市史』第10巻 社寺編）

また、4月26日に俳諧師2人が青森町に逗留します。町役がようすをうかがったところ、ふたりとも侍であることが判明します。彼らもまた間者ではないかと疑われます。

さらにこの間、4月24日には仙台領水沢の武次衛門など3人が青森の目明（末端の警吏で犯罪者が赦免されてなることもある）千吉のもとを訪ねます。この3人、どうもようすが怪しいということで内々に調べてみると、武次衛門は盛岡の目明であることが判明します。そこでやはり間者ではないかと疑われ、弘前に報告されます。しかも、武次衛門は盛岡の目明の「頭分」藤田武衛門で、彼は南部家で重要な御用がないと他国へは出ることがない人物とも分かりました。

しかも、目明同士は、どこの国の目明に対しても頼まれればどんなことでも内々に打ち明けるという、いわば「目明情報ネットワーク」があるというのです。武次衛門が千吉を訪ねたのはそのネットワークを利用するためだったとみられます。

このように、わずか10日足らずのうちに、南部領から姿を偽るなどをした、どうにも怪しげな人たちが関所を越え青森にやってきているのです。では、彼らの目的は一体何だったのでしょうか。

実は、これに先立つ4月6日、「相馬大作事件」として知られる、下斗米秀之進による弘前藩主襲撃未遂事件で、これを事前に弘前藩側に密告した嘉兵衛という人物が、狩場沢の番所に訴え出て弘前に連れて行かれていたのです。

4月19日以降の間者と思しき人たちの入れ込みはこれに関わるもので、嘉兵衛の「盗出」、もしくは毒薬が使われるのではないかという情報が伝えられています。

一般に、早道や目明の活動は、彼らの活動が秘密を前提にしているので記録には残りにくいと言われています。今回紹介した史料の全文は、工藤大輔「史料館蔵津軽家文書『青森勤番並同所御蔵廻御締方見聞言上書』について」(『弘前大学国史研究』117号、2004年)に翻刻しましたので、よろしかったら併せてご覧ください。